

平成22年度 埼玉古墳群周辺確認調査の報告

— 埼玉8・9・10号墳の確認調査 —

佐藤 康二

1 はじめに

さきたま史跡の博物館では、埼玉古墳群の範囲を確定し、指定範囲の拡大を検討するための基礎資料を得るため、行田市教育委員会の協力のもと、平成19、20年度に「埼玉古墳群範囲確認調査」を実施した。微地形の確認、古墳所在の伝承がある地点の調査、將軍山古墳の周堀の位置の確認等の成果があった(西口2009、西口・佐藤2010)。

平成21年度からは、埼玉古墳群と周辺遺跡群との関係を解明し、今後の史跡整備及び調査・研究の基礎資料を得るために、周辺遺跡の分布や立地・地形などの調査を目的とした「埼玉古墳群周辺確認調査」を開始した。平成21年度は埼玉古墳群の南西側の水田域を集中して調査した。ここは塚もしくは古墳の所在の記録が残る箇所であったが、調査の結果、古墳の痕跡は検出されなかった(佐藤2011)。

平成22年度は、稻荷山古墳東側にある円墳跡の調査を行った。なお、この「埼玉古墳群周辺確認調査」は国庫補助事業である。

2 調査箇所の選定及び古墳名称について

今回の調査対象地の円墳跡については、昭和44年1月28日に当館が撮影した航空写真にクロップマークとして写っていたものである(第1図参照)。この航空写真は稻荷山古墳の外・内堀や失われた前方部の輪郭がはっきり映し出されたことから有名な写真である。今回調査した円墳跡も墳丘がなく、かつ調査履歴もないまま航空写真のみを根拠に遺跡台帳に記載された珍しい古墳である。

稻荷山古墳及び埼玉5号墳等の円墳跡の調査成果も、ほぼクロップマークが遺構を示していることを証明したが一つの疑念があった。今回調査対象の円墳跡が所在する水田は、將軍山古墳周辺と比較すると土取りにより数十cm削平されており、さらにはその後の耕作等の影響も懸念され、遺存状況は極めて悪い可能性があった。

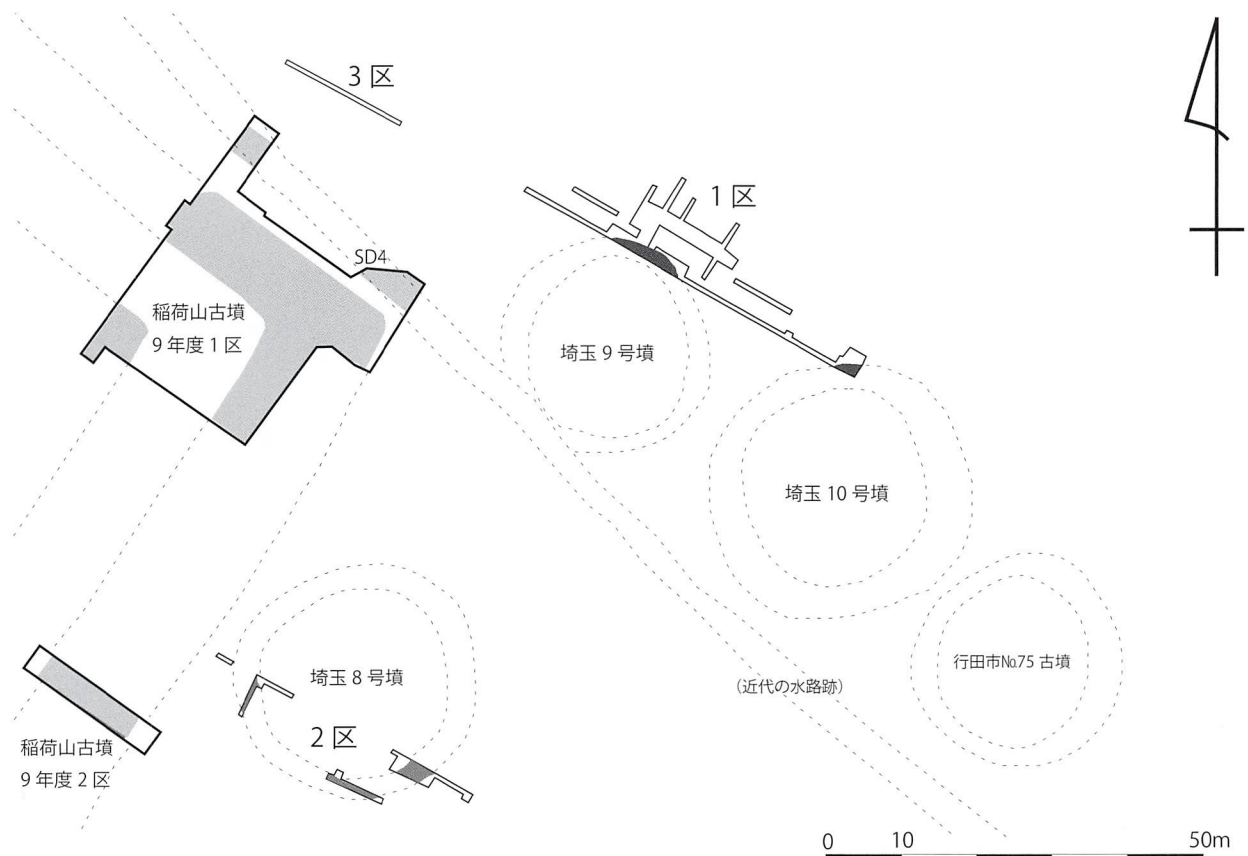
これら円墳跡については、現在民有地であるが、埼玉県教育委員会が策定した「史跡埼玉古墳群保存整備基本計画」においては将来的には墳丘・周堀を復原することが望ましいとされている。そこで、遺構や確認面の遺存状況を把握すること、出土遺物により時期を確定すること、という二つの調査目標を立てて調査箇所の選定を行った。また調査方針としては、保存目的の確認調査であり、かつ将来的に整備する可能性もあることから、覆土の除去は最低限とした。

トレンチの設定については、円墳跡はすべて民有地に所在し、さらにそのほとんどが現在も水田として利用されているため、休耕田及び県有地に絞って調査を実施する方針をとり、地権者及び行田市土整備事務所の承諾を得て調査に着手した。

なお、この調査箇所の選定については、考古学の専門家、地元有識者などで構成する史跡埼玉古墳群保存整備協議会に諮り、平成22年3月4日に了承された。



第1図 トレンチ配置とクロープマーク(昭和44年航空写真と合成)



第2図 トレンチ配置図と各古墳周堀推定線

今回対象とした円墳跡の名称は、従来は行田市No.72、73、74古墳であったが、今回の確認調査により古墳と確定したため、今後の調査・研究を鑑みて県生涯学習文化財課及び行田市教育委員会と協議し、埼玉8号～10号墳の名称を付した。以下、新名称を用いて報告する。

3 平成22年度周辺確認調査

平成23年2月16日～3月2日の間の計10日間で調査を実施した。調査はいずれも人力により表土掘削を行い、遺構の有無及び地形確認、記録写真撮影、断面図作成、人力による埋め戻しを行った。なおトレンチ平面図は専門業者に委託してGPSデータ計測により測定した。

調査区については、第1、2図のとおり旧忍川堤防に接し、9、10号墳所在箇所を第1区、南側の8号墳所在箇所を第2区、さらには稻荷山古墳外堀北側の県有地を第3区とした。

(1) 第1区 概況

第1区にはクロップマークにより2基の古墳跡が所在することが推定されてきた。「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」に記載された古墳名と規模は西側がNo.73古墳、推定直径24mである。東側がNo.74号墳、推定直径は同じく24mである。位置的には旧忍川右岸の堤防に接しており、現況は休耕田である。

現表土の標高は約16.5～16.6m、確認面はローム面で標高16.3～16.4m前後であった。すなわち現地表から10～20cmの深さで検出されるソフトローム層が確認面であった。

なお(6)でも触れるが、航空写真には9号墳西側に隣接し、白い円形のクロップマーク状のものがあるため、その範囲にもかかるようにトレンチを設定した。

(2) 埼玉9号墳(旧No.73古墳)

調査区際に設定した第1トレンチで周堀覆土が確認されたため、トレンチを拡げてプラン確認を実施した。墳丘側の立ち上がりは調査区外のため検出できなかった。

堀底底面の最深部の標高は15.98mで現地表から60cm、確認面から42cmの深度を測る。検出できた最大幅はおよそ1.5mであった。

覆土の状況は第5図のとおりは概ね三角堆積を呈しているが、墳丘側が調査区外となるため内側からの流入は認められなかった。覆土最上層は堅緻な黒褐色土が堆積する。古墳外側からの堆積状況は周堀法面崩落等に伴う崩壊ロームブロック等が観察されることから、自然堆積と想定する。肉眼観察の結果は、最下層にも水性堆積を示す状況は認められなかった。

出土遺物は確認面(第5図2層)から時期不詳の土師器小片が1点検出されたのみである。

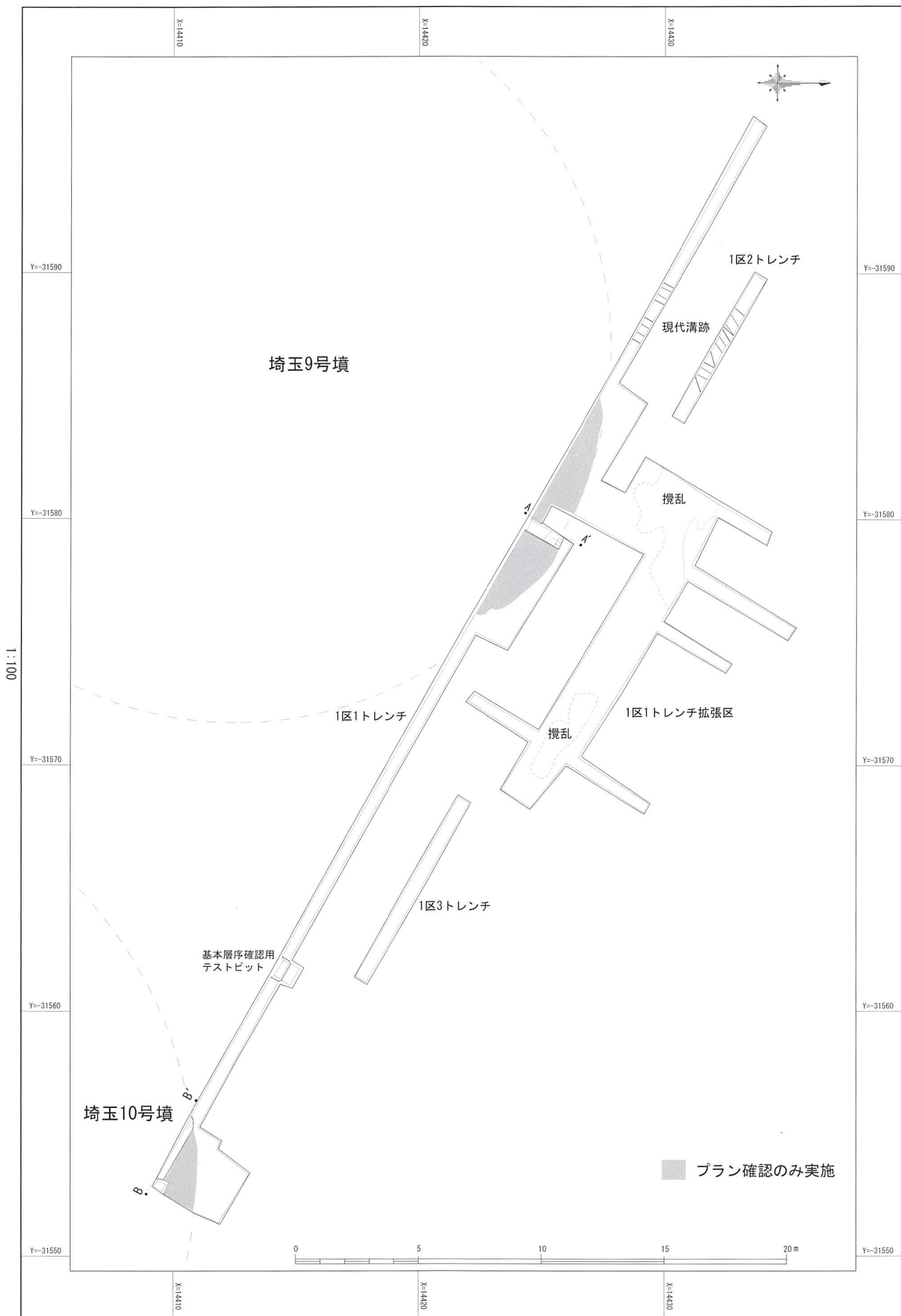
第1図のクロップマークから、今回検出された箇所よりやや北側に周堀が所在すると想定していた。そのために1区1トレンチ拡張区を設定したが、写真6、7のとおり不定形な落ち込みを検出した。念のために一部調査したところ、立ち上がりはシャープな壁面をもちオーバーハングしていることから、現代の機械掘削の痕跡であることが判明した。

また古墳跡西側で検出された溝跡についても覆土の状況等から近・現代の所産と考えられる。

墳丘側の立ち上がりが検出できなかったため、墳丘径は不明とせざるを得ないが、クロップマークとの照合で周堀外寸径は約31mと推定する。

(3) 埼玉10古墳跡(旧No.74古墳)

第1トレンチ西端で一部検出されたため、トレンチを拡げてプラン確認を実施した。堀底レ



第3図 1区全測図

ベルを把握するため、底面を精査した。湧水のため、堀底底面までは調査することができなかった。

プラン確認段階から平安時代の土師器小片及び数mm程の炭化物片が散見されたため、古墳周堀の上に平安時代の遺構が構築されている可能性を考慮して精査を行ったが、古墳周堀を壊す掘り込みは認められず、断面観察からも重複する状況はないことから、平安時代の遺物が古墳周堀に流れ込んだものと推定する。

なお本周堀は確認面から40cmで湧水が始まり、底面を検出することはできなかった。確認面からの深度は50cm以上を測り、隣接する9号墳よりも深い。

9号墳同様、墳丘側の立ち上がりが見出できなかったため、墳丘径は不明とせざるを得ないが、クロップマークとの照合で周堀外寸径は約35mと推定する。

出土遺物は小破片のため図化できなかったが、平安時代の土師器、須恵器、羽口の可能性がある被熱痕の顕著な土師質の遺物及び鍛冶滓の可能性が高い遺物等が出土した。出土した層位は覆土最上層の2層が一番多かったが、第4層まで少数ながら確認された。確実に古墳時代に帰属する遺物は検出されなかった。

(4) 第2区 概況

第2区にはクロップマークにより1基の古墳跡が所在することが推定されてきた。「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」に記載された古墳名と規模はNo.72古墳、24mである。クロップマークにより西側の稲荷山古墳外堀に極めて近接する。なお本調査区は南に位置する將軍山古墳周辺からは一段低い水田面である。これは昭和になってから大規模に土取りした結果であることを近隣にお住まいの方からお聞きした。

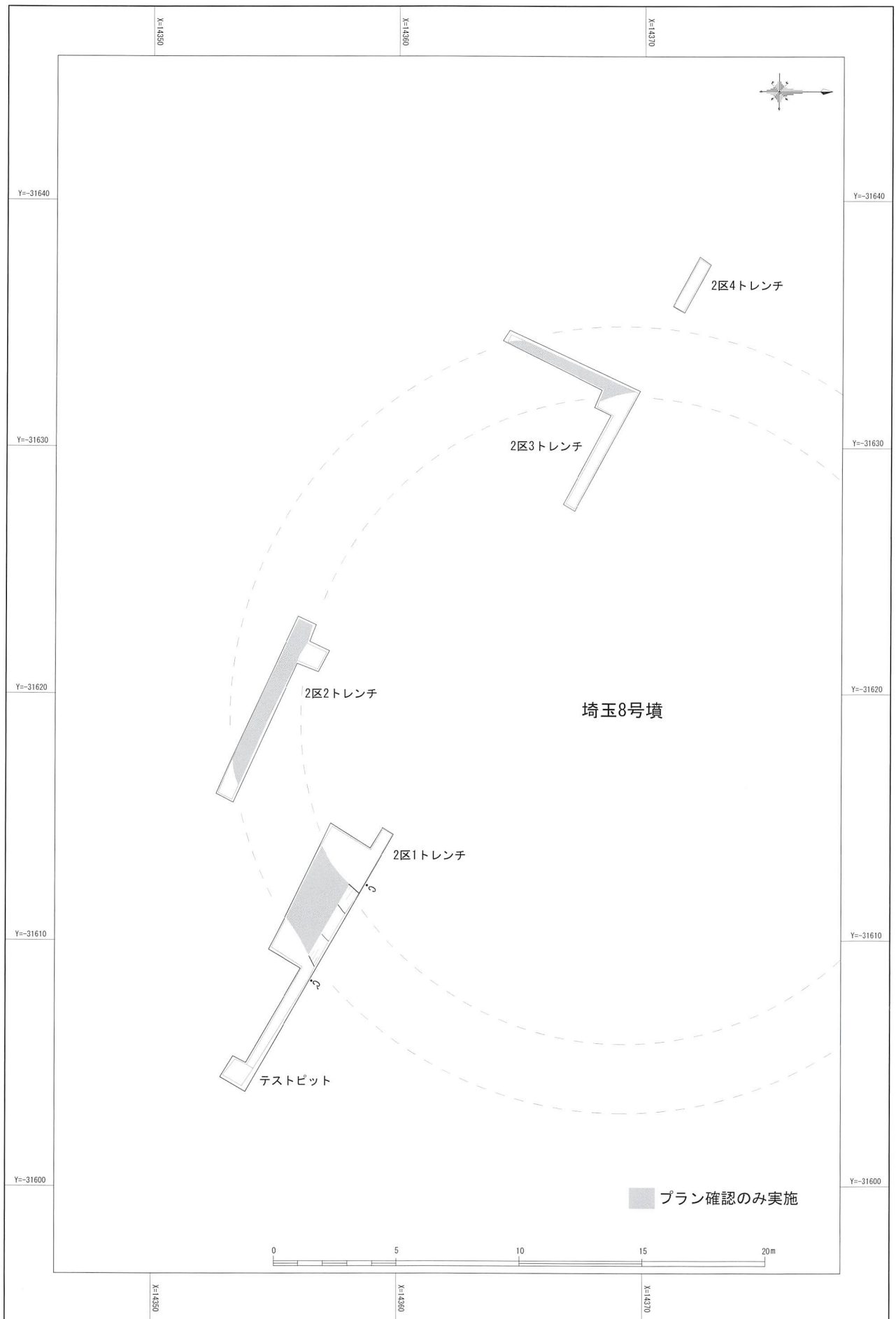
現表土の標高は約16.7～16.8m、確認面はローム面で標高16.4～16.5m前後であった。すなわち現地表から20～30cm下のソフトローム層が確認面であり、第1区とほぼ同様であった。

(5) 埼玉8号墳(旧No.72古墳)

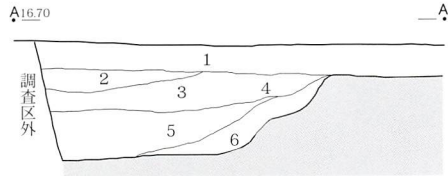
第4図のとおり、クロップマークを参考に1トレンチから順次調査を行い、古墳周堀のプランを狙い計4箇所の特レンチ調査を実施した。結果として第1図のとおり、クロップマークと対応して周堀プランが検出された。なお3トレンチと4トレンチの間には行田市道が所在するため、稲荷山古墳外堀と埼玉8号墳周堀の間の正確な距離は計測できなかったが、クロップマークと稲荷山古墳9年度1,2区調査成果から、最も接近する箇所約4mの間隔であると想定される。

第5図のとおり、確認面から約40cm下で堀底が検出された。覆土の状況は三角堆積を示していた。墳丘側に対応する方向からは崩壊ロームブロックを多量に含有する5層が流入している状況であった。なお底面の検出前から湧水が始まった。

出土遺物は第6図1の土師器甕の口縁部が2区3トレンチの遺構確認面から出土した(写真16参照)。残存率は20%、推定口径15.4cm、残存高5cm。鈍い黄色を呈する。胴部外面は横ケズリで口唇に端面を有する。胎土に石英、赤色粒子、半透明の灰色粒子を含有する。なお同一個体と思われる胴部破片も出土している。平安時代に帰属するものである。第6図2の円筒埴輪片は2区4トレンチの表土中から出土したもので、帰属する古墳は不明である。外面は縦位のハケメ、内面は斜位ハケメで一部指頭痕を残す。明赤褐色を呈し、胎土に粗砂を含有する。

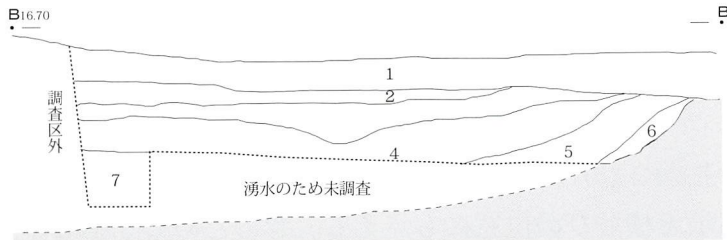


第4図 2区全測図



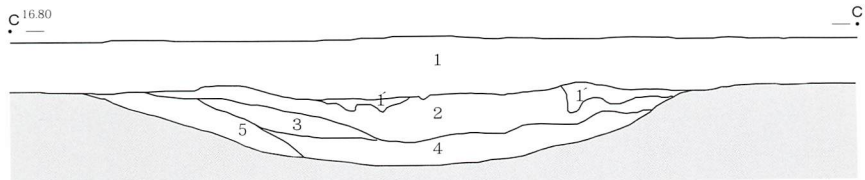
1区 第1トレンチ (埼玉9号墳) 土層註

- 1 水田耕作土 (2.5YG5/1)
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子微量含む。しまり強し。
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子少量含む。
- 4 褐色土 (10YR3/4) 5mm前後のローム粒子多量に含む。軟質。
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子少量含有。暗褐色ローム(黒色帯)崩壊ブロックを多量含む。
- 6 黒褐色土 (10YR2/2) 暗褐色ローム(黒色帯)ブロックを少量含有。5層より色調暗し。土質均一。



1区 第1トレンチ (埼玉10号墳) 土層註

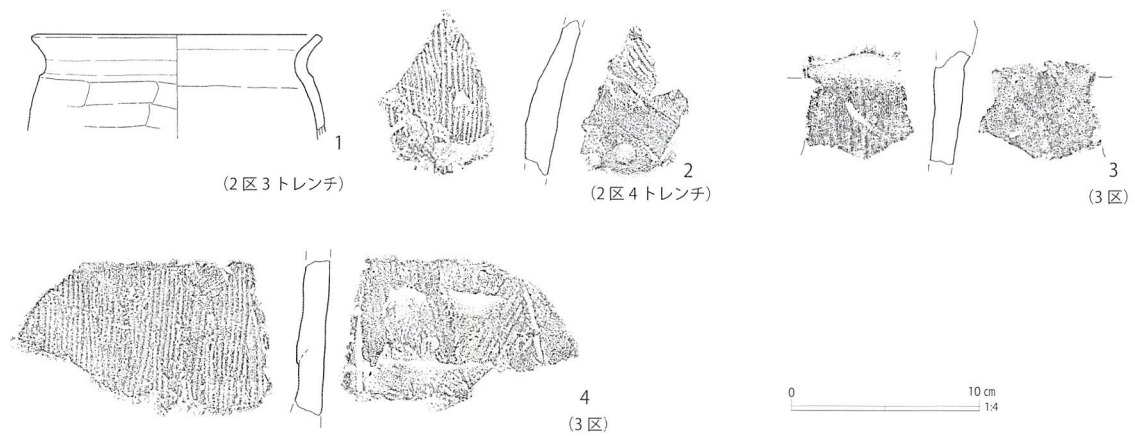
- 1 水田耕作土 (2.5YG5/1) A 軽石多量含有。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) 非常に硬緻。5mm前後の炭化物多く含有。径2~3mmの橙色粒子(土器粒子状)多く含有。平安時代土師器片含有層。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 2層より軟質。炭化物、橙色粒子とも少量含有するが、2層土の1/10程度の量。
- 4 黒褐色土 (10YR2/2) 3層土に近似するが、橙色粒子極微量含有、炭化物なし。2、3層より軟質。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) 径2~3mmのローム粒子を少量含有。
- 6 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子微量含む。軟質。
- 7 黒褐色土 (10YR3/2) 3、4層より茶色味強い。土質ほぼ均一だが、極微量橙色粒子含有。



2区 第1トレンチ (埼玉8号墳) 土層註

- 1 水田耕作土 (2.5YG5/1) A 軽石多量含有。1層土に2層土混入。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子微量含有。しまり強し。
- 3 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ロームブロックを少量含む。2層土より軟質。
- 4 褐色土 (10YR4/4) 崩壊ロームブロック(暗褐色)多量含む。軟質。
- 5 褐色土 (10YR4/6) 崩壊ロームブロック、ローム粒子を極多量含む。軟質。

第5図 セクション図



第6図 出土遺物

(6) 第3区

調査着手に先立ち、第1図の航空写真を観察した結果、埼玉9号墳の西側に隣接して周辺の円墳跡と同規模の丸いクロープマークが認められた。他の円墳跡のそれとは異なる陰影であり、従来も古墳跡の可能性を指摘されたことはないと思うが、規模的には直径40m前後かつ埼玉9、10号墳及び行田市No.75古墳と横並びの位置にも見える。念のため第3区としてトレンチ調査を実施した。

現況地面下約60cmまでは公園造成に起因する客土、その下に約10cmの水田耕作土があり、その下がローム層であった。遺構は検出されなかったが、水田耕作土から埴輪片が検出された。

第6図3の円筒埴輪は透孔は、突帯下端に切り込まれる上部が直線となることから半円形を呈すると思われる。器面の摩耗顕著で詳細は不明だが外面に縦位のハケメが認められる。浅黄色橙色を呈し、胎土に赤色、灰色粒子を含有する。第6図4の円筒埴輪は外面は縦位ハケメ、内面斜位のハケメ。内面に成型痕が残る。明赤褐色を呈する。灰色粒子を胎土に含有する。

上記2点の埴輪以外にも埴輪片が数点出土した。いずれも水田耕作土からの出土で、帰属する古墳は不詳であるが、第6図3については、透孔の形態及び色調から稲荷山古墳に帰属する可能性が高い。

4 確認調査の成果と課題

(1) 考古学的課題

今回の調査で残念なことは、各古墳に確実に帰属する遺物が検出されなかったことにつきる。埼玉古墳群内の既調査の小円墳跡については、二子山古墳と前後する時期のものが主体を占める。地点の離れた8～10号墳の帰属時期が判明すれば、小円墳跡を含めた埼玉古墳群の構成原理の解明、あるいは旧忍川対岸の白山古墳群との関係を考察する上でも重要なデータとなる。将来、整備等の構想が具体化した場合は、再度の調査が必須と考える。帰属する時期を確定すること、埼玉2号墳(梅塚古墳)、同4～7号墳において確認されたブリッジの有無等、クロープマークからは読み取れない詳細な情報を把握するためである。今回の調査で判明した各古墳周堀の遺存状況からすれば、面的な調査を実施すれば解明することは難しくないだろう。

(2) 史跡整備に関する課題

8、10号墳から平安時代の遺物が出土した。今回のごく狭いトレンチ調査かつ地点の離れた

2カ所で発見されたことを考えると、近接して平安時代の遺構が存在する可能性が極めて高いと考える。このことは埼玉古墳群の整備に大きな影響は与えないが、遺跡保護の目的からすれば、平安時代に目をつぶるのではなく、遺構の所在等を確認した後に古墳整備の方針を検討する必要がある。

次に将来的に今回調査した円墳の整備に関する問題点を挙げると、円墳の面的なプラン確認の必要性は当然として、確認面までの深度の問題が浮上した。いずれの古墳周堀も現地地表下20cmで遺構面となる。仮に周堀を30cmの深度で復原する際に、確認面との間に30cmの保護層を確保する場合、60cmの盛土後に掘削工事を行わないと遺構に影響を与えてしまうことが判明した。

埼玉古墳群の整備において、墳丘下の旧表土の標高と現況地表の標高との乖離が常に問題視される。墳丘下の旧表土の標高より周辺の標高が概して低い点については、昭和の耕地整備等による後世の土地開発にのみ起因するのか、あるいは古墳時代の墳丘造成に係り、周堀の土量のみでは不足することから、周辺表土を削り取って使用(高橋2005)したかは、諸説あり、ここでは立ち入らないが、平成22年度から開始した奥の山古墳の整備に際しても常に頭を悩ませた問題である。埼玉古墳群の整備に際し、古墳群造営時の地形の復原は避けては通れない重要課題である。今後も継続的な確認調査を実施し、微地形の把握を端緒に、旧河道等の地形変換点を探り、埼玉古墳群の成立時の選地の要因や、石室石材、埴輪等の具体的な搬入ルート of 解明に努めていく必要がある。

《引用・参考文献》

- 西口 正純 2009 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第3号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 西口正純・佐藤康二 2010 「埼玉古墳群周辺の範囲確認調査」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第4号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 佐藤 康二 2011 「平成21年度 埼玉古墳群周辺の確認調査報告」『埼玉県立史跡の博物館紀要』 第5号 埼玉県立さきたま史跡の博物館
- 埼玉県教育委員会 1994 『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』
- 高木豊三郎 1936 『史蹟埼玉』 埼玉村教育委員会
- 高橋 一夫 2005 『鉄剣銘一一五文字の謎に迫る』 新泉社
- 埼玉県教育委員会 2007 『武蔵埼玉 稲荷山古墳』
- 埼玉県教育委員会 2007 『史蹟埼玉古墳群保存整備基本計画』



写真1 調査区 遠景(稻荷山古墳上から撮影。左が1区、右が2区)

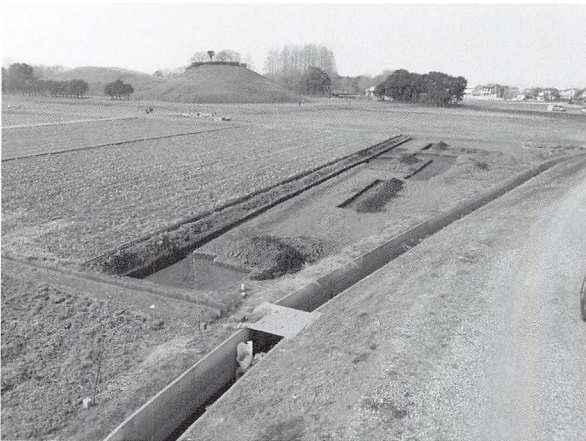


写真2 1区全景(東から)

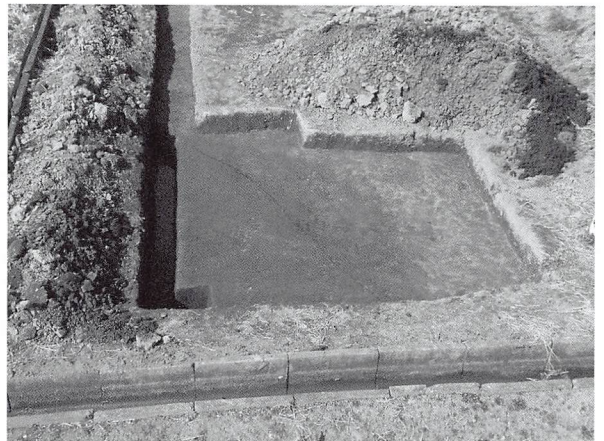


写真3 1区埼玉10号墳 プラン

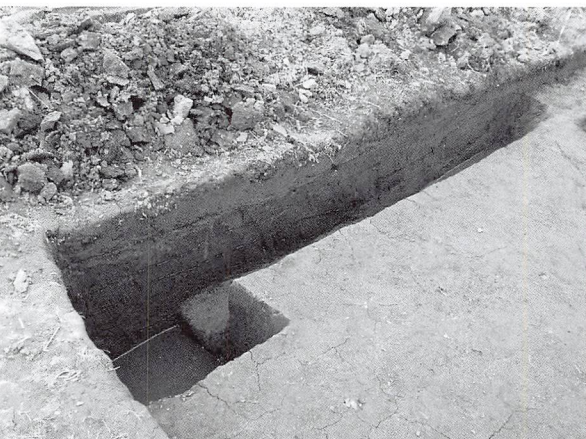


写真4 1区埼玉10号墳 セクション



写真5 1区埼玉10号墳 セクション(アップ)



写真6 1区埼玉9号墳 プラン(東から)

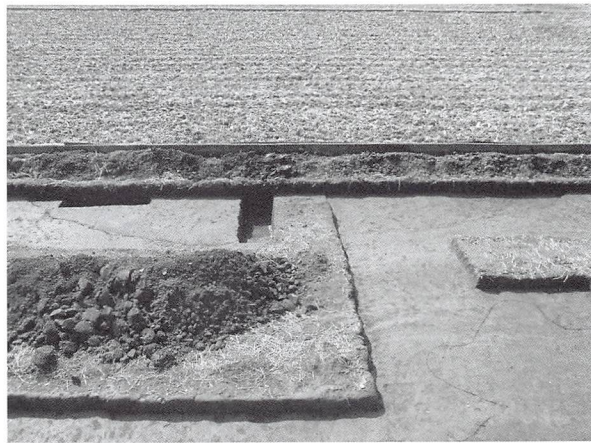


写真7 1区埼玉9号墳 プラン(北から)



写真8 1区埼玉9号墳 セクション

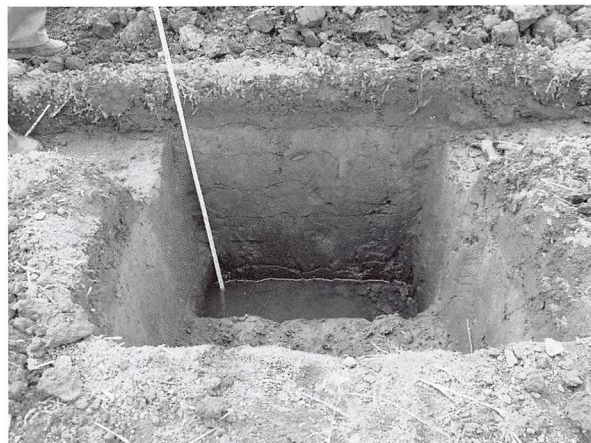


写真9 1区 テストピット



写真10 2区 調査区全景(奥に見えるのが稲荷山古墳)



写真11 2区1トレンチ埼玉8号墳 調査風景



写真12 2区1トレンチ埼玉8号墳 セクション

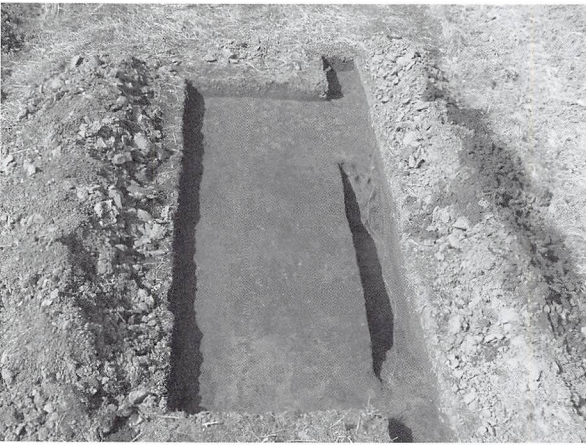


写真13 2区1トレンチ埼玉8号墳



写真14 2区2トレンチ(奥は1トレンチ)



写真15 2区3トレンチ埼玉8号墳



写真16 2区3トレンチ 遺物出土状況